

読むことにおけるリテラシー概念の変遷

——新たなリテラシー論の構築に向けて——

上 松 恵理子

1. はじめに

リテラシー (literacy) は、もともと文字の読み書き能力に限定された言葉である。しかし、文字の受容の形態は、記号論やあらゆる社会学の次元で人間の文化と深く関わり合うため、時代とともに変遷を遂げた。また、文字を記録する媒体も時代によって進化してきた。時代を遡れば木簡、グーテンベルグ以降の印刷物、そして、情報社会に入ってからにはパソコンやケータイ、マルチメディアなどの媒体によって表象され、受容の形態が大きくシフトしたのである。中世以前の聖書を読む行為から、その後の印刷技術によって可能となった大衆における個別の読書行為、あるいは、その後の情報化社会に至る経緯は凄まじく変化し、今やテクノロジーの変化における情報知などがテキストを読む際の必須の能力となってきた。これに伴い、文字によって書かれたテキストの読みの概念も変遷した。

このような読みの概念の変化とともに、テキストが表象する周辺環境の変化や、文字と媒体との相互作用によって、リテラシーの概念も変遷していくと考えられる。従って、このような多義的な要素を含む新たなリテラシーの概念を包括的に考察し、そのメカニズムを重層的に解明することが求められる。そのためには、これらのリテラシーに関わるあらゆる学問分野を横断し、総合的なリテラシー研究の構築を目指さなければならない。

そこで、本稿では、リテラシーの要素を多角的に考察することが、リテラシーの変遷をとらえ、さらには新たなリテラシー概念を構築する一つの方策であると考え、次の三つの複眼的観点をとらえて考察することとする。その観点とは、(1)リテラシーの多角的要素 (2)アイデンティティの表象 (3)新たなリテラシーの出現、である。それらを考察する理由は次の点である。

(1) リテラシーの多角的要素

リテラシーは読み書き能力といわれるが、読むことや書くことには、多角的要素が含まれている。例えば、声を出して読む行為と、黙読とは、受容に違いがある。そして、時代によっても、その受容形態は様々である。さらに、読むことは、書き手と読み手の双方向のコミュニケーションであり、そのプロセスがリテラシーには大きく関わっていると考えたからである。

(2) アイデンティティの表象とリテラシー

テキストを読む際、テキストに内包された、アイデンティティの表象を理解することが、その作品のコンテキストの理解につながっていく。読むことをテキストの受容としてとらえると、文字や言葉を理解するだけでなく、言葉とテキストとの関連性やそのコンテストを明らかにし、受容のメカニズムを理解することが重要なリテラシーであると考えたからである。また、テキスト論と、その変遷における「他者」とテキストの関係性における相互作用から、リテラシーをとらえることが重要であると考えたからである。

(3) 新たなリテラシーの出現

主にメディア・リテラシーとセミオ・リテラシーを考察する。リテラシーの変遷にともない、新たに様々なリテラシー論が提唱された。その中で、近年、読むこと概念を拡大するきっかけとなったものがこの2つである。これらをリテラシー変遷のプロセスとしてとらえ、考察する必要性があると考えたからである。

以上のことから、3つの多元的な視点から具体的に考察していくことがリテラシーの変遷をみる上で必要であるとする。そのために本稿では、リテラシーというキーワードで多元的にアプローチをおこなう。

2. リテラシーの多元的要素

紀元前5世紀末には、書物は、読まれることを目的としたものと、本文の確定と保存を目的としたものとに分けられた¹⁾という。ギリシャ語の「読む」という動詞は「ネメイン (nemein)」といい、本来の意味は分配するという意味²⁾である。その語源をたどると、声を出し、集団の前で分配行為をすることであるという。その後、中世初期のヨーロッパの読むことの変化として一番顕著なのは、音読から黙読への移行であった。その後、読みの習得と文字の習得を分けるという行為がなされるようになった。読むことと書くことについて、オングは、声の文化と文字の文化の比較しつつ、研究した。オングは、読むことと書くことに関して、「書くことによって生じる[コンテキスト]からのへだたりから、言語表現におけるある新しい種類の正確さが生まれる³⁾。」あるいは、「いったん、書くことによって、性格さと分析的な厳密さを求める感覚が生まれ、内面化されると、そうした感覚はもちろん[口頭での]話の中にもフィード・バックされるし、事実そうになっている⁴⁾。」と述べている。このような「深い内面化」は、書くこと、つまり印刷文化がもたらした所産でもある。これらを踏まえると、テキストは静止している物体を指すものではなく、書かれたもの(=文字)あるいは、音声と、あるいは書き手と読み手との動的関係を指す。この関係性は一つの行動学的コミュニケーション論の一つということができる。

さらに、オングはテキストにおける「間テキスト性」に着目している。実際、文字で書かれたテキストが出現するとき、声の文化においてはそうではないが、読み手や聞き手はその場にすぐ

はいない。つまり、書き手の聴衆はつねに虚構であり、テキスト間の相互影響（＝間テキスト性）があると考えられる。「間テキスト性」とは、「個々のテキストは必然的に他のテキストに関係し、それらの意味は、諸関係がいかに認識され注目されるかによる、暫定的で多元的なものだということを示唆するもの¹⁰」である。その技術の中に、読者の虚構としての役割を想定することも含まれている。これらの関係性を包括してみると、オングの考え方は、コミュニケーション理論における双方向（インタラクティブ）な働きと共通項がみられる。オングにとってく声の文化にもとづく思考と表現の特徴が書きとめられ、視覚化された言葉と調和することゝは、累積的な（つまりハーモニーをめざす）傾向であり、書くことを切り離す傾向ではない、双方向なものとしてとらえることができる。

このような双方向な関係の変化を、ヴィットマンは、読書の変化として述べている。「かつてなかったほどの濃密な全く新しい信頼関係、想像上の友情関係が作者と読者の間に、文学の作り手とその受け手の間に生まれた。読書形態は以前よりもく集中的くであって、く拡散的くではない¹¹。」と述べた。さらに、テキストの読解を容易にしようと、本の表記上の取り決めがいくつか行われた。これは、受容者側の立場を、つまり読者を考慮した取り組みであった。

読むことが、時代によって変化していることを理解することも、一つのリテラシーといえる。例えば18世紀頃の読書の形態でさえこのように変化したのである。ヴィットマンの読書の変容¹²をまとめるとこのような点をあげることができる。

- ・ 18世紀にはすでに親しんだ規範的なごく少数の書物—ほとんどは信仰書でとりわけ聖書を、生涯を通じて幾度も手に取り、注釈を加える集中的で反復的な読書があった。
- ・ 次にそれに代わって、新しく知識を得たり、気晴らしをすることができる、また、新しく雑多な本に、現代的で世俗的で個人的な形で、熱中する拡散的な読書の実践が現れた。
- ・ 高等教育を受けることのできた管吏と「学識者」、つまり知識人で構成される「教養ある市民階級」が貴族と農民からなる社会的構造に加わり、価値観を構成し、読書の状況や条件に変容をもたらした。（たとえ「読書革命」の用語を避けようと望んだにせよ、旧体制の末期に全ヨーロッパで拡大しつつあった民衆の読書習慣が地方差や社会階層差に応じて、く質的にも量的にも分化していったくことを否定することはできない。）
- ・ 以後は伝統的な集中的読書が次第に時代遅れと見なされ、社会的におとしめられていき、むしろ拡散的な読書の実践慣行が支配的で必須の文化の規範になる。
- ・ 受容的な聴取能力が向上することで、識字教育とは無関係に間接的な「文学教育」がもたらされる。（以前の「原始的」読書は集団的識字力とは表裏をなしている。）

これらのことから、この時代において、読むことは多様に量的にも質的にも分化されたものになっていったことがわかる。これらの読む行為は、テキストを受容する際の構成要素であり、これは印刷文化の発達により、変遷を遂げたと考えられる。読むことにおいて、印刷文化の発達が

もたらしたことは、多くの人が主に読書活動として活字に触れ、活字として表された文字を受容する活動である。つまり、読む行為の変化によって、多くの民衆がこのような読書を始めることによって、新たなリテラシーの出現が始まったといえる。

しかし、「象形文字である漢字を使い、同音異義語を持つ日本人には、表音文字の論点をすべてあてはめるわけにはいかない¹⁰⁾。」といった考え方もある。これは、テキスト受容の際のリテラシーの概念を、単純に海外の記号論と結びつけることを疑問視する考え方である。日本語で音読のする際の受容の概念には、このような課題がみられる。

このように、リテラシーには、これらの課題を認識する能力や、あらゆるメディアにおける言語処理能力が関わるが、それだけでなく、オングの言う「深い内面化」の構造のプロセスや、表記上の文字の認識、読むことのメカニズムを理解することまでも関わるといえる。

3. アイデンティティの表象とリテラシー

アイデンティティは文化的な課題として、人種や階層などのさまざまな研究に分岐している。前述した、ヴィトマンの読書の変容から、階層によって読むことが分化していったことがわかる。人々がアイデンティティ確立をする上では、階層や人種、あるいはジェンダーにおいても、リテラシーが必要なものとなる。例えばカルチュラル・スタディーズの読むことにおいてもアイデンティティの表象が見出される。カルチュラル・スタディーズのもっとも良く知られている理論的戦略は「文化生産物、社会的実践、そして制度さえもいわゆる〈テキスト〉として〈読む〉¹¹⁾」というものである。さまざまなイデオロギーは、あらゆる組織において反映されている。そしてメディアも、消費主義のイデオロギーを反映している。イデオロギー的な前提はテキストがアイデンティティを表象する際、暗示的なアナロジーとなりうる。単なる文字を読むことが出来るという文字のリテラシーを持つことだけでなく、さまざまなリテラシーがなければ、文字の識字力があっても、政治的、支配的な文化からもたらされるメッセージまでも、受け入れるほかはない。リテラシーは、文字の読み書き能力だけでなく、日常的な問題についてイデオロギー的な前提が内包されているといった視座を持つことができる能力も含まれるのである。このように、リテラシーという言葉にはこのような多義的な意味が内包されている。

イーザーによれば、「意味構成の相互主観的な構造は、社会・文化的コードないしは個人における慣習の価値の違いに応じて、極めて多様な意味内容を用うるものであって、それぞれが別個の意味解釈の基盤に立っている¹²⁾。」という。また、ヘゲモニー・モデル説では、「オーディエンスによるテキスト解釈は、一般的に言って、支配的な文化的価値や信念と協調関係にある¹³⁾。」とされ、「受容理論においては、受容した情報を解釈するとき、オーディエンスは能動的な役割を果たす¹²⁾。」というのである。「イデオロギーは文化を生み出すだけでなく、わたしたちの自分自身についての意識をも作り上げる。」という。

さらに、あらゆるアイデンティティの表象は、メディアに限らず、イデオロギー的な役割を持って表象されている可能性がある。このことを知ることは大切なことであり、ここでも、批判的

なパラダイムであるさまざまなリテラシーの重要性があげられる。社会的な構造とその関係性をとらえることなしには、新たなリテラシー概念の構築もない。

そもそも、新たなリテラシーが必要になったのは、さまざまなテキストの出現に起因する。テキストの受容が時代を経てどのようになされてきたのかを問い直すことも新たなリテラシーをとらえる上で必要なことである。テキストを受容する際、イメージとともにイデオロギーまでも無意識に内面化する枠組みがある。例えば、「多くの哲学的枠組みの中において、無意識はわたしたち個人的人格の中核をなすもの、わたしたちの本質の生産物とみなされていた⁽¹²⁾。」のである。そして、「その場所に社会的に生み出されたアイデンティティの感覚が主体性⁽¹⁴⁾」であり、この主体の概念は他者との関係性によってテキスト受容を重層的に決定する。

脱構築の考えにおける「他者」とテキストの関係性の概念は、新たなテキスト論として理解される。形而上学のテキストはデリダにとって、形而上学の「他者」の痕跡である。つまり、極度に注意深い読みによって、抹消された「他者」の痕跡を読み解くことが、脱構築の読みである。脱構築解釈が開くのは、「他者」の到来のある種の可能性だといえる。「脱構築とは否定の思想ではなく、むしろラディカルな肯定の指導⁽¹⁵⁾」である。この脱構築解釈（＝他者のある種の可能性）に従うことが、デリダの主張である。デリダは異なる言語を用い、異なる見地からものをみるアウトサイダー（＝他者）の参加を擁護した。

一方、他者と自己との関係において、二分法は、〈他方より優れているとみなされたり、重んじられたりという傾向がある〉ととらえる考え方である。「差異性」において、自己と他者を見出す脱構築の読みだけでなく、この二分法の概念を理解することも重要である。

ガーゲンは脱構築批判の立場を取りながら、二分法について、このように述べている。

脱構築論によれば、「物質」という言葉は二分法、すなわち「非物質」との差異にもとづいて、その意味を獲得する。そこで、この二分法を「物質／精神」を例にとって考えてみると、「宇宙は物質である」という命題は、物質を精神から区別できなければ意味をなさない。何が物質であるかを言うためには、精神をみなしうる何かが存在しなければならない。ところが、物質が意味あるものになるために、精神が存在しなければならないとすれば、もはや「宇宙イコール物質」ではありえない。別の言い方をすれば、物質主義の世界観では、精神世界が片隅に追いやられてしまっているのであり、精神は語られない「不在」である。この「不在」の「在」がなければ、「宇宙は物質である」というその意味が成り立たなくなってしまう。あらゆる物質主義的世界観が精神の抑圧に支えられているというのは、こういう意味である。社会において支配的なグループは自分たちに特権があると主張し、「他の人々」を自分たちの対極にいるものとみなす。脱構築者はこのような私たちの常識となっている区別が抑圧的なものであると主張し、二分法をくつがえそうとしたり、その境界を消し去ろうとしたりする⁽¹⁶⁾。

これは、対話やコミュニケーションを前面に押し出すことにより、対話や議論はどこからその力を得ているのかの重要性、あるいは他者との関係性において、逆に主体が無視されてしまうことである。ガーゲンはこのような課題を踏まえた上で3点を論述している。

- ・ 非言語的シグナル、ノンバーバル・コミュニケーションの重要性
- ・ 物質的なコンテキストの影響、つまり、その言葉がどこで語られるかの重要性
- ・ コミュニケーション・メディアの重要性

テキストはテキスト外部のコンテキストに関与する。そもそも読者はテキストによって触発されたイメージ形成という能動性を通じて、テキストの状況に参加し、テキストが作用するのに必要な条件を作り出すのである。このような行為が多様な解釈へと導かれるのである。このようなことから、さまざまなコンテキストの理解が新たなリテラシーへと繋がっていくと考えられる。

これらの理解は、テキストや書かれている文字を受容する際、一つのリテラシーとなる。テキストの変遷とともにリテラシーの概念も変遷し、リテラシーは多義的にテキストを解釈する能力となって来ている。

4. 新たなリテラシーの出現

今やリテラシーには多義的要素が含まれるようになったといえる。最近では文字のリテラシーだけではなく、さまざまなメディアを理解し関わり、また批判し実践する能力としてのメディア・リテラシーや、意味実践や表現をおこなうことができる能力、セミオ・リテラシーの概念⁽¹⁷⁾も登場した。このようなさまざまなリテラシーは、教育の中にも、その進化とともに段階的に変遷するようになる。この2つのリテラシーの概念を考察していく。

メディア・リテラシーにはさまざまな概念がある。「もともとリテラシー (literacy) とは新聞や書物などの文字を読んだり、文章を書くための能力のことで、これは読み書き能力、識字力などと呼ばれていた。そのリテラシーにメディアという言葉をもすびつけたのがメディア・リテラシーである。つまりこれは比喩によって成り立った概念である。テレビやラジオ、コンピュータなどを使うときに活用される能力のことを、文字メディアに対する読み書き能力のようなものとして言い表している⁽¹⁸⁾」という。また、「メディア・リテラシーとは、人間がメディアに媒介された情報を構成されたものとして批判的に受容し、解釈すると同時に、自らの思想や意見、感じていることなどをメディアによって構成的に表現し、コミュニケーションの回路を生み出していくという複合的な能力⁽¹⁹⁾」でもある。さらに市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを作り出す力を指す。そして、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシー⁽²⁰⁾という。これらのことから、情報があふれる中でメディアを主体的に読み書き、コミュニケーションを創造して、社会に働きかける能力であると考えられる。日本のメディア・リテラシーの取り組みはようやくさまざ

まな領域で市民権を得て来つつある。そして、学校教育におけるメディア・リテラシー教育の導入は、画一思考、教師主導の日本型近代学校教育の枠組みを突き崩していく可能性をもっている。

メディア・リテラシーで大切なことは Media Text（メディア・テキスト）を複合的に解釈することである。国語科教育とメディア・リテラシーは両者の目的や効果が類似し重なっている⁽²¹⁾。海外ではメディア・リテラシーの実践は90年代以降学校教育や市民教育の中で行なわれてきた。日本の国語科教育において既に、新聞・映画シナリオなどを使った実践がメディア・リテラシーを育むものとして行なわれていた⁽²²⁾。テキストの読みの観点からみると、動画メディアも活字メディアも、受容し解釈していく必要があるという側面からとらえればどちらも重要である。メディア・リテラシーの実践として「メディアの表現技法を学ぶ」「メディアを使って表現する」「メディア作品の背景にある文脈を批判的に読み解く」といったものがあるが、国語教育の中にも「文章の表現技法を学ぶ」「文章で表現する」「文学作品の背景にある文脈を批判的に読み解く」といった学習があった。よって、両者の目的や効果は部分的に類似している⁽²³⁾といえる。

今日まで国語科の読みには様々な方法論があり、多くの授業実践も存在する。そもそも、「国語は文字のリテラシーに関する中心的な教科であり、文字の読み書きの教育に関して長い歴史と独自のノウハウを持っている⁽²⁴⁾」ということからも、今後、国語科教育の読むことの中でメディア・リテラシーを育むことは、新しい視座を取り入れることと考えられる。そのためにはメディア・リテラシーなどの新たなリテラシーの概念を取り入れることも国語科教育にとっては必要なことである。

現在の日本のメディア・リテラシー教育においての問題点は、情報教育とメディア・リテラシー教育との混同である。さらに、メディア・リテラシーの重要な能力である、批判的思考を教育の中で、進んで取り入れるなどの例は少ない。これはメディア・リテラシーのクリティカル・シンキングの概念が批判的思考として、間違った意味でとらえられていることに依拠する。「クリティカル」の意味は日本では「批判的な」と訳されることが多い。しかし Critical とは「鑑識眼のある」という意味であり、「目の高い」ということである。クリティカル（鑑識眼を持った複眼的な見方）・シンキング（思考）は重要であり、メディアへの批判的能力ばかりを重要視するものではない。

現代社会におけるメディアの重要性の増大や、活字から映像へのコミュニケーションへのシフト、さらに加速するメディアの商業化など、現代社会において、メディアを学ぶことは、文字を学ぶことと同様に必要なこととなってきた。さらなる情報化の進展により、新たな情報リテラシーの重要性も増大すると考えられる。また、基本的な知的スキルの大きな格差が拡大を続けるであろうといわれている⁽²⁵⁾。理由としては、情報技術（IT）の高度化があげられる。これによって生み出される情報リテラシーの格差は、伝統的なメディア利用の格差と密接な関係にある。このことは文化の階級性と密接に結びついており、このような情報技術の発展は従来からある階級間の格差をさらに強化するものだといえる。

これらの格差を無くしていくためにも、リテラシーは必須なものと考えられる。リテラシーは

自然に身に付くものではなく、リテラシーの多義的要素を知り、学習していくことによって、さまざまな理解が可能となってくる。つまり、言葉を学ぶように、多能的にメディアを学ぶことが求められる。このように、メディア・リテラシーには多義的要素がある、ということを理解することが重要である。

一方、セミオ・リテラシーとは石田の提唱する、一つの新たなリテラシーの概念である。パースは記号解釈の無限のプロセスを「セミオーシス (Semiosis)」と呼んでいるが、石田によればパースのこのセミオーシスは、ソシュール派の記号学よりも、積極的な役割を演ずるという。「パースの記号論は宇宙が記号に満たされ、人間自体をいくつもの記号のプロセスから成り立つもの⁽²⁶⁾」とする立場である。また、「セミオーシス」という概念を情報科学や認知科学がいう「情報処理」と並行した記号処理のプロセスとして理解させることがパースの立場だという。インターフェースを通し、「人間の意味作用のプロセス」と「機械による情報処理のプロセス」は接している。「記号過程 (セミオーシス)」に参加している間に、機械は情報処理を実行しているのである。実際すべての記号の意味は、その記号がどのような別の記号との解釈関係に入るかによって決まるという。さらに、形象からさまざまな対象を知覚する人間は、自分の心の中に「等価な記号、あるいはさらに発展した記号」を次々に作りだしていく。「無限のセミオーシス⁽²⁷⁾」は一つの記号が、それを解釈する記号を作り出していくプロセスであり、それは、無限の連鎖をかたちづくるプロセスのことである。石田はセミオ・リテラシーについての主張において、このパースの記号解釈の理論からこのセミオ・リテラシー理論を考えたとする。

このようなセミオリテラシー（意味批判力）の概念とは、一人ひとりが意味や情報の質について、固有の判断力を持ち、固有の意味実践や表現をおこなうことができる能力のことである。そして、これは新しい形のリテラシーである。リテラシーとは、読むこと、書くことのできる能力だけでなく、理解する能力、それについて議論する能力、自分の生活のなかに自由に位置づける能力をも意味するものとなりつつある。石田は、機械の端末になるのではなく、使いこなす自由な主体にどのようなものになるのか、どのような人々の結びつきが可能になるのか、その想像力をもちうる視点とはなにか、意味環境としてのメディアとは何か、どのような意味形成のメカニズムがそこには働いているのか、を原理的に理解して創造的な意味実践に結びつけるために人々が備えるべき能力として、リテラシーは再定義されなくてはならないのだ、という主張をしている。この概念は、メディア・リテラシーとともに、新たな概念を構築するために必要なリテラシーである。

5. おわりに

文字がメディア機器の画面に書かれたものか、分厚い装丁の書物に書かれたものなのか、文字の色は何色か、そして、どのようなコンテキストのもとで、何が表象されているのかということを知ることはテキストのメッセージを理解することにつながる。また、読書の方法（音読か黙読か、あるいは、誰と読むかなど）や読者をとりまく文化、イデオロギー、読者の社会階層などによって、それぞれにリテラシーが存在すると考えられる。つまり新たなリテラシーとは、このよ

うな表象におけるあらゆるコンテキストやそのテキストの持つメッセージ性に由来する。それを読み解くことが一つのリテラシー理解の始まりある。このような多元的視野でリテラシーの概念を広げることにより、新たなリテラシーの概念が構築され、その結果としてリテラシーの変遷をみることができる。今後、あらゆるテキストを受容する、コミュニケーションのメカニズムが新たなリテラシーの変遷へとつながっていくことから、新たなリテラシーの概念はさらに進化していくと考えられる。今後はさらにその過程を明らかにしていきたい。

注

- (1) 浦一章 (2000)『読むことの歴史』大修館書店 p.11
- (2) ジャスベル・スヴェンブロ (2000)『アルカイック期と古典期のギリシャ黙読の発明』大修館 pp.33-73
- (3) W-J・オング (1991)『声の文化と文字の文化』藤原書店 桜井直文, 他, 訳 pp.215-224
- (4) 同上
- (5) P・ブルッカー (2003)『文化理論用語集カルチュラル・スタディーズ』新曜社 p.48
- (6) ラインハルト・ヴィットマン (2000)『18世紀末に読書革命は起こったか』大修館書店 pp.407-444
- (7) 同上
- (8) 石川九楊 (1999)『二重言語国家・日本』日本放送出版協会 pp.13-18
- (9) グレアム・ターナー (1999)『カルチュラル・スタディーズ入門』作品社 p.113
- (10) Iser, Wolfgang (1982)『行為としての読書: 美的作用の理論』轡田収訳 岩波書店 p.264
- (11) アート・シルバブラッド (2001)『メディア・リテラシーの方法』安田尚訳 リベルタ出版 p.124
- (12) 同上
- (13) グレアム・ターナー (1999)『カルチュラル・スタディーズ入門』作品社 p.41
- (14) 同上
- (15) 高橋哲哉 (1998)『デリゲー脱構築』講談社 p.180
- (16) ケネス・J・ガーゲン (2004)『あなたへの社会構成主義』ナカニシヤ出版 pp.37-44
- (17) 石田英敬 (2003)『記号の知/メディアの知』東京大学出版会 pp.359-363
- (18) 水越伸 (1999)「デジタルメディア社会」岩波書店 p.93
- (19) 同上 p.95
- (20) 鈴木みどり (2001)「メディア・リテラシーを学ぶ人のために」世界思想社 p.8
- (21) 上松恵理子 (2005)『映像メディアを読み解く力をつけよう』国語教育実践講座 ニチブン
- (22) 井上尚美, 中村敦雄 (2001)『メディア・リテラシーを育てる国語の授業』明治図書
- (23) 上松恵理子 (2005) 日本教育メディア学会発表要旨集

- (24) 山内祐平 (2003)『デジタル社会のリテラシー』岩波書店 p. 150
- (25) 橋本健二 (2001)「階級社会日本 青木書店」p. 241
- (26) 17に同じ pp. 57-63
- (27) 同上 pp. 65-67